

第30回 障害者の主張大会 最優秀賞作文 令和元年12月5日開催

「愛」と「ゆるし」

小池 英二

先ずはじめに私の全てをさらけ出し、ここで発表することが怖かった。しかし、殻を破り少しでもこの体験を共感してくれる人達を願い、この世の中に、この体験談を還元していくことを誓います。

私の病気を受け入れるまでのつらい葛藤からお話し致します。私がこの統合失調症という病名を頂いたのは十八歳の時でした。初めは「病気じゃない！病気なんかじゃないんだ！」と主治医さえも疑い、受け入れることができませんでした。受け入れるのに七年間の月日を要しました。入退院を繰り返す長い長いトンネルの日々でした。受け入れるきっかけとなった言葉がありました。主治医からの一言でした。「病気になったのには意味がある」この言葉の不思議な力により難病と向き合えるようになりました。しかし、意味があるということは、「自分に問題があった」ということだと気付きました。それからは、この病を「問いかけ」として捉えるようになりました。この病を受け入れた瞬間でした。でも、思うように働けない自分に嫌気がさし、身近な親にこのやり場のない思いをぶつけていました。今思うと両親には私のことを思うと夜も眠れない程、心配していただろうと思います。なぜなら私は二十九歳の時、結婚して、一人の娘を授かりました。子供のことを思わない親は一人としていない気持ちを味わったからです。子供を授かったということは使命があると気付かされました。それから幼少から修練していた剣道をはじめ、日々（毎日）一千本から二千本、面をかぶり素振りを行いました。暑い暑い夏も、寒くてかじかむ冬も一日も休むことなく行いました。そして、三十三歳になって初めて大学に入学致しました。大学に行っても悩みは尽きませんでした。というか、大学に入ってからのの方が辛い日々が続きました。それを忘れるために、一生懸命、勉強しつつ剣道もしました。大学二年の後期の一月七日に第二子のせがれが誕生致しました。それにより、二年の三月三十一日を以て山梨に帰郷することになりました。そして両親に買って戴いた家で家族四人で幸せに暮らしていました。しかし住んでから五年目に土木委員長とPTAの会長を受けることになりました。忙しくて苦しい日々が続きました。それは、妻の精神状態は限界で、支えてあげる努力もしたのですが、ある朝、書き置きがあり、「もう限界です！」と……。

子供二人を連れて遠い名古屋の家に帰ってしまったのです。私はショックであ然として立ち直れませんでした。愛する家族を失ったからです。結局、裁判までして私は家族を失いました。苦しい苦しい日々が続きました。二人の愛する子供と妻を失ったからです。これが私の人生の全てです！でも、いつもそばに父と母がいてくれました。私が寝室で「上を向いて歩こう」を聴いていると、両親も一緒に泣いていてくれたそうです。私も胸が張り裂けそうでしたが、父と母はそれ以上に私のことを思い、辛い辛い思いをさせてしまいました。

こんな波乱万丈な人生でも、もっと苦しんでいる人がいると気付かされた場所があります。ぎんが工房の内藤施設長が私と母に仕事をくれました。ぎんがの皆は、車いすの人もいます。

でもリハビリで必死に立って歩こうとする姿を見た時、自分よりも苦勞している人達がいる
と思い、安心した居場所が見つかった思いがして「ほっ」としました。私は最愛の妻との幸せ
はあまり長くは続かなかったけれども、今は感謝しています。なぜなら、私に試練を与えてく
れたからです。憎み、うらむときもありましたが、ここを一步、前向きになって歩くには、相
手を「愛し」、「ゆるす」こと！が必要だと悟りました。この世の中、世界は「愛とゆるし」と
いう大きな神様がいることを知ったのです。

家族を失って三年経とうとしています。でも、今の私は、今までの私と違います。「愛する」
ことと「ゆるす」ということを覚えたからです。この大宇宙の真理も「愛」と「ゆるし」で出
来ていると思います。

統合失調症は治すことは難しいといわれています。しかし、この病氣と向き合いながら前
向きに一つ一つ丁寧に乗り越えていきたいと思っています。

そして最後に、今まで苦勞をかけ続けてきた両親にこんな私を産み育ててくれて、寄り添
ってくれて、本当に有り難うという感謝の言葉を捧げたいと思います。

「お父さん！お母さん！ 本当に、本当に、ありがとう！」